

課外活動を通して

～ 医療従事者へのお菓子提供 ～

Providing Sweets to Medical Professionals: Extracurricular Activities

平田 安喜子、市瀬 尚子

要旨：

長崎短期大学は地域の中堅人材を育成することを目的に教育を行っている。平成 27 年度「大学教育再生加速プログラム (AP)」に採択されたことを契機に、学びの場を学内だけでなく地域に広げていくことになった。令和 2 年度、製菓コースは食物科より地域共生学科へ学科改編し、従来行っていた地域活動をさらに充実させ、学生たちの学びのフィールドを学内だけでなく地域へ拡張していくことにした。新学科としてスタートした令和 2 年度は、新型コロナウイルス感染症の発生に伴い、学生の学びの場は学内外共に制約を受ける状況になった。学科の基幹科目となる「地域と人々」をどのように開講させるかを考え計画したのが、医療従事者へのお菓子提供という活動である。地域の方を対象とした製菓製造の活動が、学生にどのような意味を持つのかを振り返り、アフターコロナでの「地域と人々」の活動に生かしていきたいと考える。

Abstract：

Nagasaki Junior College provides education intended to help the career development of mid-career professionals in the region. The adoption of the “Accelerated Program for the Revitalization of University Education” in 2015 was an opportunity to expand learning opportunities not only on campus but also in the local community. In 2020, the Confectionery Course was transferred from the Department of Food Science to the Department of Regional Symbiosis to further enhance regional activities that had been conducted in the past, and to expand the field of learning for students. When the new department was launched, the outbreak of Covid-19 led to restrictions upon students' learning both on and off campus. We planned to open the “Community and People” course, which is the core subject of the department, by offering snacks to healthcare professionals. In this study, we reflect upon what confectionery production for local people means to students, and we will apply it to the “Community and People” activity in After Corona.

キーワード：課外活動、地域活動、自己肯定

Keywords : extracurricular activities, community activities, self-affirmation

1 はじめに

長崎短期大学（本学）は地域の中堅人材を育成することを目的に教育を行っている。平成 27 年度「大学教育再生加速プログラム (AP)」に採択されたことを契機に、学びの場を学内だけでなく地域に広げていくことになった。これまで食物科製菓コースとして行っていた課外活動が、AP の採択に伴い市内のイベント参加や、お菓子作り教室開催など活動の場が広がったように思える。

令和 2 年度に、製菓コースは食物科より地域共生学科へ学科改編し、従来行っていた地域活動をさらに充実させ、学生たちの学びのフィールドを学内だけでなく地域へ拡張していくことにした。新学科としてスタートした令和 2 年度は、新型コロナウイルス感染症の発生に伴い、学生の学びの場は学内外共に制約を受ける状況

となった。学科の基幹科目である「地域と人々」をどのように開講させるかを考え計画したのが、医療従事者へのお菓子提供という活動である。学生たちは自身が感染予防対策を実践するだけでなく、最前線で地域住民の命を守るために勤務されている医療従事者へ感謝の気持ちを、お菓子の提供という活動で表現した。後日関係者から届いた感謝のお便りを通じて、自分たちの活動の意義を感じたようである。限定された対象者ではあったが、地域の方を対象とした製菓製造の活動が学生にどのような意味を持つのかを振り返り、アフターコロナでの「地域と人々」の活動に生かしていきたいと考える。

2 地域共生学科へ改編

本学は、平成27年度に「大学教育再生加速プログラム 長期学外学修プログラム」に採択され、国際コミュニケーション学科（現国際コミュニケーションコース）を中心に、様々な学外学修体験を推奨してきた1)。製菓コースにおいても、「製菓」をキーワードに、佐世保市内の子どもに関わる機関、団体が中心となって児童福祉週間のイベントとして開催される「佐世保わんぱくひろば」や、三ヶ町商店街組合主催のクリスマスイベントなどに参加し活動を行った。これら学外学修体験の場を拡大する中で、学生のコミュニケーション能力などの向上を感じることができた。

また地域の中での活動を通し、地域が持つ様々な課題と向き合うことができ、地域を学び、地域で活躍する中堅人材の育成の必要性を改めて実感することになった。これまでの専門領域の垣根を低くして地域共生という理念の下、令和2年度、食物科栄養士コース、食物科製菓コース、保育学科介護福祉専攻、国際コミュニケーション学科を合わせた地域共生学科として改編し、それぞれ食物栄養コース、製菓コース、介護福祉コース、国際コミュニケーションコースとしてスタートした。

3 新型コロナウイルス感染症予防対策下の活動

長崎短期大学紀要第33号で川原らが本学における「新型コロナウイルス感染症」感染防止の取組を報告している2)。本学では令和2年度は自宅待機の遠隔授業期間を経て、6月より一部対面授業を開始した。製菓コースでは製菓実習を中心に対面授業を行い、講義系は遠隔授業を取り入れるなど分散登校を計画し感染対策を行った。まずは製菓衛生師養成校として規定された科目の開講を中心に進め、卒業の妨げにならないことを念頭に置いていた。当初は1年間で終息するのではという甘い期待があったため、学外学修体験となる活動は翌年度開講を考えていたが、令和3年度を迎えても感染状況は改善されず、学内外のイベントは制約を受けたままであった。特に飲食を伴う活動は実施が難しく、立案もままならなかった。

4 活動内容

令和2年度入学の地域共生学科として1期生にあたる2年生にとっては、地域でのボランティア活動は進学時の目的の一つでもあり、学科共通科目である「地域と人々」の活動にあたる。制限された中で、何か地域と関りを持つ活動が出来ないかと考えていた中で目にしたのが、新型コロナウイルス関係の寄付行為である。令和2年度中すでに地域の中で医療従事者に感謝を伝える活動が始まっていた。

長崎県漁業協同組合連合会やNPO法人などをはじめ、市内の菓子店や専門学校の有志が集まった「おあいこプロジェクト」などが医療機関等に対しさまざまな贈り物をしていった。そこで製菓コースとしても直接交流することが叶わなくても、お菓子を通じて繋がりを持つことが出来ると考え、医療従事者へのお菓子の提供を行うことにした。学生に活動の趣旨を説明し活動に参加する意思を確認後、スケジュールの調整を行うとともに、窓口となる佐世保市コロナ対策室へ連絡し提供日の調整を依頼した。

(1) 第1回目活動 令和3年6月16日 佐世保市長に手渡しし、市内5つの医療施設へ提供

これら製造したお菓子を個包装し、学生一人ひとりが書いた医療従事者への感謝のメッセージを添え、390袋を箱に詰合せ、代表学生3名が市長に直接贈呈した。

Table (表) 1 第1回活動計画

活動日	該当時授業	製品名	製造人数
6月7日	製菓実習Ⅰ（和菓子 1年）	かすてら饅頭 60個	17名
6月9日	ボランティア	クッキー 120袋	10名
6月10日	製菓実習Ⅲ（洋菓子 2年）	フィナンシェ 60個	9名
6月14日	製菓実習Ⅰ（洋菓子 1年）	クルミのタルト 80個	17名
6月15日	製菓実習Ⅲ（和菓子 2年）	浮島 30個 村雨 30個	9名



提供したお菓子とメッセージ



お菓子の贈呈

新型コロナウイルス感染症対応に奮闘されている医療従事者の皆様へ
～ 感謝を込めて～

本学 製菓コースの学生たちは“自分たちが作ったお菓子で多くの方を笑顔にしたい”そのような夢をもち、日々勉学に励んでいます。例年、地域のイベントには自分たちが作ったお菓子を提供することで、地域の方々と多くの交流をしていました。

しかし、昨年度から新型コロナウイルス感染症予防対策のため、学外での活動を中止しています。

そんな中、学生たちが自分たちのできることをそれぞれが得意なことで実現しようと発案し、「医療従事者にお菓子の提供をしたい!」ということになりました。

今回は、みんなの健康そして命を守るため、最前線で働かされている医療従事者の皆様へ改めて感謝申し上げるとともに、ワクチン接種によってみんなの日常を取り戻すことができることを期待して、390食（Thank You）のお菓子の詰め合わせを贈りたいと思います。

学生たちの気持ちを込めたお菓子を通して、医療従事者の皆様にとっても笑顔をもたらせたら嬉しく思います。

本学教育の理念は茶道教育です。茶道教育で培ったおもてなしの心を、お菓子の提供を通して、医療従事者の皆様にお届けします。

大変な活動の中、一瞬その大変さを忘れ、笑顔になれることを

活動の趣旨（医療施設に向けて）

(2) 第2回目活動 令和3年10月25日

新型コロナウイルス感染症の影響で今年度も学園祭はオンラインによる実施が決まり、学園祭での製造販売が出来ないことから、従来行っていた大量製造の体験を実行するため、医療従事者への提供を再度計画した。今回も、これら製造したお菓子を個包装し、550袋を学生たちの医療従事者への感謝のメッセージを添え箱に詰合せ、5つの医療機関別に贈呈した。

Table (表) 2 第2回活動計画

活動日	該当時授業	製品名	製造人数
10月18日	製菓実習Ⅱ (和菓子 1年)	栗饅頭 150個	17名
10月20日	製菓実習Ⅱ (洋菓子 1年)	クッキー製造 6種類 290袋	9名
10月21日	製菓実習Ⅳ (洋菓子 2年)	パウンドケーキ 5種類 330個	9名
10月22日	製菓実習Ⅱ (洋菓子 1年)	クッキー製造・包装	17名



提供したお菓子と代表学生



提供したお菓子とメッセージ

5 学生の様子

基本的に製菓実習への取り組みは熱心な学生が多く、また提供する菓子は授業で初めて指導を受ける内容ということもあり、手を抜くことなく丁寧な作業を行っていた。又事前に腸内細菌検査を実施するにあたり、不特定の方に提供する場合食中毒に配慮が必要であることを伝えていた。そのため作業において衛生手袋の着用も徹底され、学生の意識の中に衛生的な配慮があることが分かった。

2回の活動終了後、医療機関からの礼状を公開し、学生たちに振り返りのアンケート調査を実施した。

担当したお菓子の製造の取り組みはどの程度

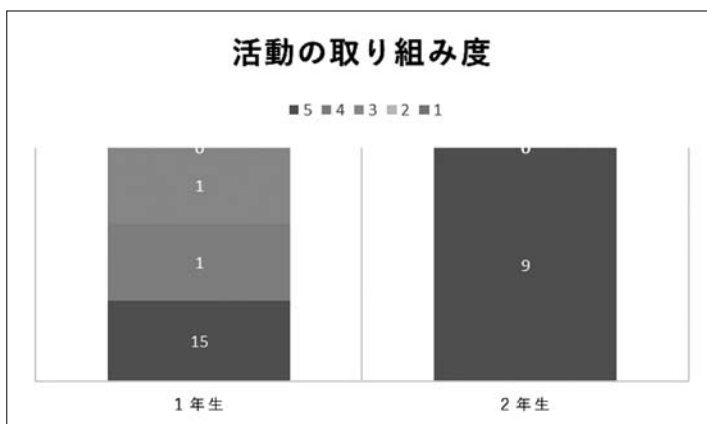


Figure (図) 6 学生の活動取り組み度

かの問いに対して、5（非常に熱心に取り組んだ）～1（熱心に取り組んでいない）の選択より自身の取り組み度を選択してもらったところ、Figurte6の通りほとんどの学生が熱心に取り組んだと回答している。あくまでも自己評価になるが、その後のコメントをみても、各自想いをこめて製造に当たっていたことがわかる。

製品を作る際に気をつけたことに対して、学生のコメントを衛生面、作業面、気持ちの3分野に分類してみると、衛生面や作業面に対するコメントが多く寄せられた。贈り物を製造することに対し、「食の安全性」を配慮する意思が見て取れる。

Table (表) 3 活動で配慮したこと

	衛生面	作業面	精神
1年生	<ul style="list-style-type: none"> ・衛生面に気をつけた（7） ・こまめに消毒をした（2） ・異物混入に気をつけた（2） ・清潔な状態で作業をする（1） 	<ul style="list-style-type: none"> ・いつも以上に綺麗な仕上げをする（4） ・サイズをそろえる（2） ・味や見た目に配慮する（2） ・丁寧にきれいに仕上げた（1） ・クオリティ（1） ・失敗しないように（2） ・怪我や火傷に気をつけた（1） ・正しく安全に作業した（1） 	<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちを込めた（1）
2年生	<ul style="list-style-type: none"> ・衛生面（6） ・異物混入に気をつけた（1） 	<ul style="list-style-type: none"> ・一つ一つ丁寧に作業した（3） ・見栄えよく作る（1） ・均一な製品作り（1） ・事前にレシピをよく見ておく（1） 	<ul style="list-style-type: none"> ・感謝の気持ちを込めて

6 もう一つの活動

(1) カフェ学

製菓コースの選択科目に「カフェ学Ⅰ」、「カフェ学Ⅱ」がある。この科目はエスプレッソマシーンを操作しラテアートを学ぶことができることから人気の科目である。授業内では交代でマシーンの操作を行うため、1回の授業で1、2回操作できる程度である。このため、ポイントを理解し技術を習得することが困難である。例年は空きコマを利用し、教職員及び学生に対して学内Caféを運営することで技術の習得を補っていたが、昨年度、今年度は感染防止の目的から、飲食物の提供は禁止であり計画することができなかった。上手になりたいと思う学生の気持ちと、課外活動を実施できていない状況から、刺激を与えることを考え立案した。それが、対象者を決めてドリンクを提供することである。

(2) 方法

毎週木曜日の2コマ目が開講日である。そこで5回の授業日を設定し、教職員対象に試飲希望者を募った。学生は授業の際にくじで試飲協力者を決め、ドリンクをお渡しすることにした。

日常的に会話を交わす機会の多い教職員もいれば、話をしたことがない教職員もいる中で学生たちは緊張しながらドリンクを抽出していた。この試飲協力者と該当学生にはそれぞれにアンケートを依頼し、教職員に関してはGoogleフォーム、学生は紙媒体にて実施した。

アンケート項目は、提供時に挨拶ができていないか、飲み物の温度や風味に関する評価である。表現は異なるが、提供した学生と試飲協力者双方に回答してもらった。今回は学生と試飲協力者の結びつけを行っていないため総合的な傾向しか判断できなかったが、学生の自己評価の方がやや厳しい結果となった。もちろん試飲協力者である教職員が甘く評価してくれたとも考えられ、評価基準は各自の裁量であることが要因であると思われるが、これまでも製菓コースの学生は自己評価が低い傾向がみられている。

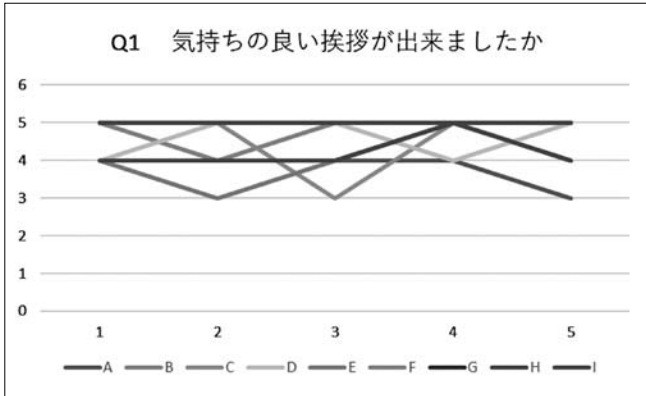


Figure (図) 7 挨拶に対する評価 (学生)

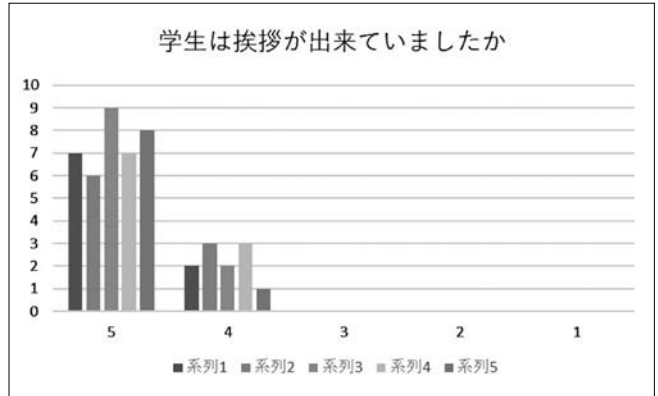


Figure (図) 8 挨拶に対する評価 (教職員)

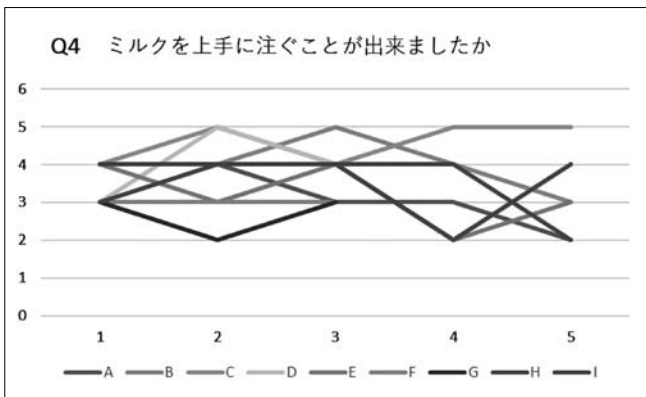


Figure (図) 9 ラテアートの完成度 (学生)

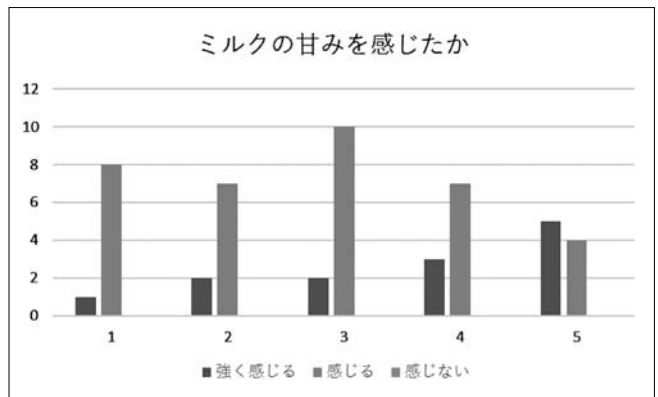


Figure (図) 10 スチームミルクの出来 (教職員)

7 まとめ

地域共生学科の改編時に掲げた、「地域の中で、地域とともに、地域に必要な人材育成」を達成するために、学生たちは自らの存在意義を実感する体験が必要だと考える。医療従事者へのお菓子の提供に対して、「自分たちが作ったお菓子で笑顔になって欲しい」、「喜んでもらえ嬉しい」、「人のためになっているのが嬉しい」といったコメントが寄せられた。

Table (表) 4 本活動の意義

	他者に対して	自己に対して
1年	<ul style="list-style-type: none"> ・笑顔になってくれたら嬉しい (4) ・人のためになっているのが嬉しい (3) ・喜んでもらえ良かった ・メッセージを見てまた行いたいと思う ・日頃の感謝を伝えることができた (5) 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの学びにつながる ・楽しく活動ができた ・自分たちも頑張ろうと思った ・次回も美味しいお菓子を届けたい ・また作りたい ・有意義だと思う (4)
2年	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの人が喜んでくれると嬉しい ・甘いもので笑顔になってくれると嬉しい ・癒しになったり、喜んでもらえ嬉しい ・感謝の気持ちが目に見える形として伝えることが出来良かった ・少しでも元気づけることができたと思い、嬉しい 	<ul style="list-style-type: none"> ・お菓子はどんなときでも笑顔になれるもの ・大量生産の良い機会となった ・活動は楽しかった ・人の役に立ったと実感できた ・医療従事者の方から直接話を伺えた

今後どのような活動を望むかの問いに対しては、今回のようにお菓子を提供する、お菓子教室やワークショップなど共に活動するなどがあげられ、活動を通して自身のコミュニケーション能力の向上や実際に対象者の反応を見ることが出来ることを期待していることがわかった。

Table (表) 5 今後希望する地域活動

	希望する活動	期待する能力
1年	<ul style="list-style-type: none"> ・地域と触れ合うボランティア活動 ・コロナで大変な方にお菓子の配布 ・地域の方にお菓子の配布 ・小中学生とお菓子作り ・商品開発で販売 ・一緒に楽しめる企画（飴細工、マジパン） ・製菓で笑顔になれる活動 ・高齢者との触れ合い 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション能力 ・お菓子のリサーチ ・直接「ありがとう」と言ってもらえる体験
2年	<ul style="list-style-type: none"> ・感謝の気持ちを届ける活動 ・留学生支援センターへの提供 ・子ども食堂や学童への提供 ・地域の人と触れ合う活動 ・お菓子の提供 ・子供向けのお菓子教室 	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に食べて喜ぶ姿を見ることが励みになる ・地域の人たちの声を聞くことは貴重な体験

このように新型コロナウイルス感染症の影響により地域活動が実施できずにいたが、学生たちは色々な世代の方との交流を望んでいることが分かった。また今回お菓子を提供した医療機関より感謝された経験に「自分たちの活動が認められた」ことが、自信につながっている。カフェ学でのドリンク提供でも同様な傾向がみられる。自己肯定を繰り返すことにより、自身の可能性を広げ成長を促している。好きなことを学ぶことだけでなく、学んでいることがどのように役立つのかを経験する中で、もっと上手になりたいという意欲を駆り出すことに繋がっていると考える。アフターコロナを見据え、どの時期にどのような体験を積むことが学生の学びに効果的か、今後も検証し計画を進めていきたい。

付記：本活動は令和3年度長崎短期大学傾斜配分研究費より助成を受け行われたものである。

参考（引用）文献

- ・ 1) 長崎短期大学創立 50 周年記念事業 大学教育再生加速プログラム事業学修成果発表
- ・ 2) 川原ゆかり、木寺友紀、滝川由香里 他 (2021)「長崎短期大学における「新型コロナウイルス感染症」感染防止の取り組み」長崎短期大学研究紀要 第 33 号,33-45 頁